

インクルーシブな学校運営モデル事業 中間報告会
信州大学教育学部附属長野 3校の実践



2026年2月20日

信州大学教育学部 戸谷健史
(特別支援学校カリキュラム・マネージャー)

進め方

- 1 信州大学教育学部附属長野3校について
- 2 発展的な交流及び共同学習の実践について
- 3 その他の取り組み





信州大学教育学部附属長野3校について

★ 3校の強み

- 追究力のある子どもたち
- 各校が徒歩5分程度の距離
- 長野県内から推薦された教師
→ 将来 長野県下に広める





1 信州大学教育学部附属長野3校について

本事業に取り組む前

長野小×特支小、長野中×特支中では、特定の学級が伝統的に交流及び共同学習を実施。長野小×特支小ではほぼ毎日交流する学級もあった一方、多くは各学期1回程度に留まる。

教員間の交流や協働もコロナ禍を経て、減少傾向



本事業を通して  3校の強みを生かして

内容の充実、回数を増やす（＝日常化）

教科の窓口からの授業づくりも

教員間の学校を超えた交流や協働の促進



発展的な交流及び共同学習への挑戦



本事業の主な目的

- ① 知的障害のある子どもとない子どもが
通常の学級の授業において互恵的に学ぶ条件を明らかにする
- ② 汎用性のあるインクルーシブな学校運営モデルを構築する



附属長野 3校における取り組みの概要図

○**交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の場**
 日常的な交流の促進、通常の学級における教科や領域、総合的な学習の時間等の授業を共同で行う。
 →**インクルーシブな授業の実施**

○**インクルーシブアシスタントスタッフの配置**
 →日々現場に入る循環役、3校全ての児童生徒と関わりをもつ、情報収集、代替・教材準備補助
 合同で授業を行う際の児童生徒同士の仲介役



○**大学、教職大学院**
 学生や教員の派遣等を行い、実践的サポートを行う

○**カリキュラム・マネージャーA、B、C (実務家教員・各校の元教員・各校に配置)**
 →主に授業や担任同士をつなぐ役
 共に教材開発、授業計画～実施～振り返りを共に行う

「インクルーシブな学校運営ミーティング」の開催 (各校管理職、大学教員、カリマネ等 参加)
 A. 連携スケジュール管理
 B. カリキュラム開発 (日課、年間行事計画、動線、使用教室等の調整)
 C. 教員のファシリテート (授業計画、交流計画のための会議の設定、教員の連携の推進)
 D. 研究の推進 (研究のスケジュール管理、調整) ※ 対面会議、チャットの使用等

○**連携協議会 (外部有識者の参画)**
 一体的運営の方針や研究の目的に沿って、ポートフォリオを基に、実践を専門的な視点で捉え、理論的サポートを行う (2回)

長野中1Dと特支中Aで
美術の授業も実施

2 発展的な交流及び共同学習の実施

R6 長野小3の1×特支小学部にじ組

長野中2年C組×特支中学部

回数

13回

11回+4回

大切にしたこと

両校児童の興味・関心の重なり
年間を貫くテーマ

その時期の生活や生徒の興味・関心を踏まえる
アイデアを出し合う

主な内容

共に遊ぶ → 共同制作①（タイルアート）
→ 合同校外学習（陶芸家とタイル制作） →
共同制作②（“記念タイルアート”制作） →
1年間の振り返り

互いを知る（レク） → 生単参加①（科学館の実験）
→ 生単参加②（ゴルフ大会：制作段階から）
→ 音楽（太鼓・合唱） → 1年間の振り返り

主な
教科・領域

小：図工・特活・総合
特支：図工・生活・生単 等

2年C：特別活動
特支：生単、音楽 等

互恵的に
学ぶ条件

中核題材の共有
深い関わりが自然に生起する構造
価値の相互承認が継続

誰もが参加しやすい活動構造
生徒同士の応答が循環する関係性
価値の相互確認

2 発展的な交流及び共同学習の実施

R7 長野小 3 の 2 × 特支小学部にじ組

回数 **事例 2** 24 回

大切にしたこと

興味・関心を起点に
必然性の文脈づくり 互惠性
多様な参加の保障 教科の窓口

主な内容

出会い・探検（羊）→ 招待し合って遊ぶ
（にじでん等）→ 行事で共に楽しむ
→ 教科で共に学ぶ（国・社・理・算）
→ 休み時間の継続交流 → 振り返り

主な教科・領域

小：国語・社会・理科・算数・特活・総合
特支：生活・国語・算数・生単 等

長野中 3 年 C 組 × 特支中学部

11 回 + 6 回

生徒主体 年間の流れ
互惠性 様々な関わり方の保障
教科の窓口

関係づくり（自己紹介・披露／招待／レク）
→ 協働プロジェクト（ハピネスパレード：制作～本番）
→ 交流の広がり（ボーリング・カップス）→
総括（お別れ音楽会）

3 年 C：特別活動
特支：生単、音楽 等



事例1 長野中 | B×特支中A (1年生) 保健体育

「心と体をほぐそう (体ほぐしの運動)」 (全4回) の実践





実施の経緯

- ・ 長野中体育科の先生方から特支中学部へ
→ 体ほぐし運動なら共に学びやすいかもしれない
- ・ 大まかな単元計画
→ 長野中体育科の先生方が立案
- ・ 打ち合わせ
→ 授業時間の調整
→ 生徒の様子等の情報交換



実施の経緯

→ 単元の目標、学習活動、学習内容、手立ての検討
どのような学習活動 & 手立てがあれば
互恵的な学びが成立しそうか

- 一緒に教材研究 & 視覚支援動画撮影
ミーティングは対面 & チャット！！



実際の授業に入る前に…

特支中A教員がIBで出前授業



特支中A生徒は事前体験



POINT 授業の担当：長野中保健体育科教員

みんなでストレッチ



まねマラソン



実際の授業の様子

人間知恵の輪



子どもの関係を分断しないよう
教師の介入は最小限

フラフープリレー



実際の授業の様子

アルファベット平均

台



POINT

準備や片付けまで一緒に行く

ボール運びリレー



POINT

巨大ツイスターゲームは、単元途中の
交流でない回に、1Bの生徒が開発

実際の授業の様子

壁のぼり

巨大ツイスターゲーム

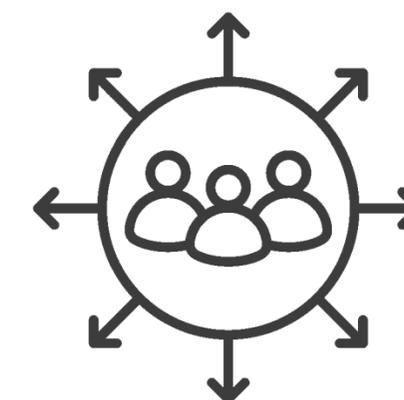
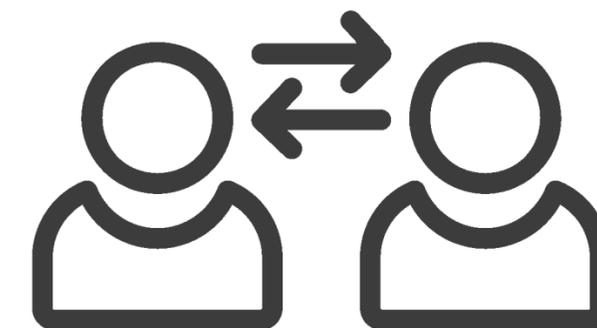


単元を通して

様々なチャレンジ運動に

- ・力を合わせ、最後まで取り組み続ける姿
- ・友達のやり方をまねる、参考にする姿
- ・思ったことや考えたことを言葉や動きで伝え合う姿
- ・違うやり方にも挑戦、発展させる姿

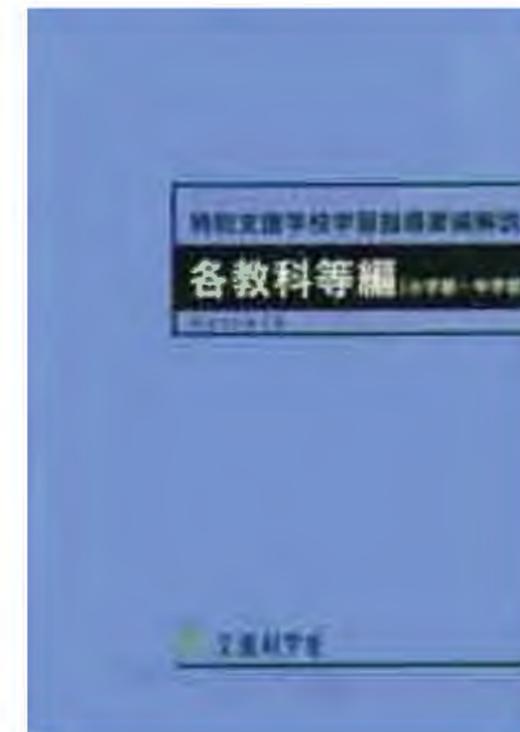
→ 「互恵的な学び」の具体像



生徒の学び、教科の育ちにつながる具体的な姿（抜粋）

	それぞれの学習指導要領に即したねらい	具体的な姿
<p>1B Aさん</p> 	<p>体ほぐしの運動に積極的に取り組むとともに、仲間の学習を援助しようとしたり、一人一人の違いに応じた動きなどを認めようとしていたりすることができるようにする【A (3)】</p> <p>※ 中学校学習指導要領</p>	<p>巨大ツイスターゲームの際、中AのCさんが1BのDさん肩に腕を回し、安心した様子で寄りかかっていた。「次は、緑」という指示が出ると、Aさんは、自分から足跡の印をCさんの近くの緑の枠の中に置き、「ここだよ」と伝えた。すると、Cさんはその印に視線を送った後、Dさんと一緒に緑の枠に移動した。Aさんは、Cさんに向かって、「ナイス」と声を掛けた。</p>
<p>中A Bさん</p> 	<p>各種運動に取り組む中で、体を動かす楽しさや心地よさに触れるとともに、その行い方が分かり、友達と関わったり、動きを持続する能力などを高めたりする。</p> <p>【中学部1段階 Aア (知識及び技能)】</p> <p>※ 特別支援学校学習指導要領</p>	<p>まねっこマラソンの際、自分から友達の動き方に視線を送った。友達が後ろを向いたり、手拍子をしたりしながら走る様子を見て、笑顔で「私もやるよ」と言って様々な動きを取り入れ、同じように体を動かしたり、アレンジを加えたりして、時間いっぱい取り組んだ。</p> <p>さらに、まねっこ体操の際、「ねえねえみんな、こんなのできる？」と伝えた後、四つん這いで後ろを向いて、片足を上げ、伸ばして止めた。友達が笑いながら同じような姿勢をとると、「すごいねえ」とにこやかに伝えた。</p>

まとめ



異なる教育課程に基づく生徒同士においても、

互恵的に学び合う中で、双方のねらいが達成された
—同じ学習の場で、異なる目標・内容の学びが両立しうる

⇒他の学年や教科、単元の実践&日常の授業とのつながり

R7年度 FUTOKUハピネスパレード (長野中3Cと特支中学部)



事例2 長野小3の2×特支小学部にじ組の実践

出会いのきっかけ (R6年12月)

3の2の飼育していたもなちゃん (羊) の散歩



にじ組児童が長野小学校の敷地を散策（R7年5月） もなちゃん（羊）や3の2児童との再会

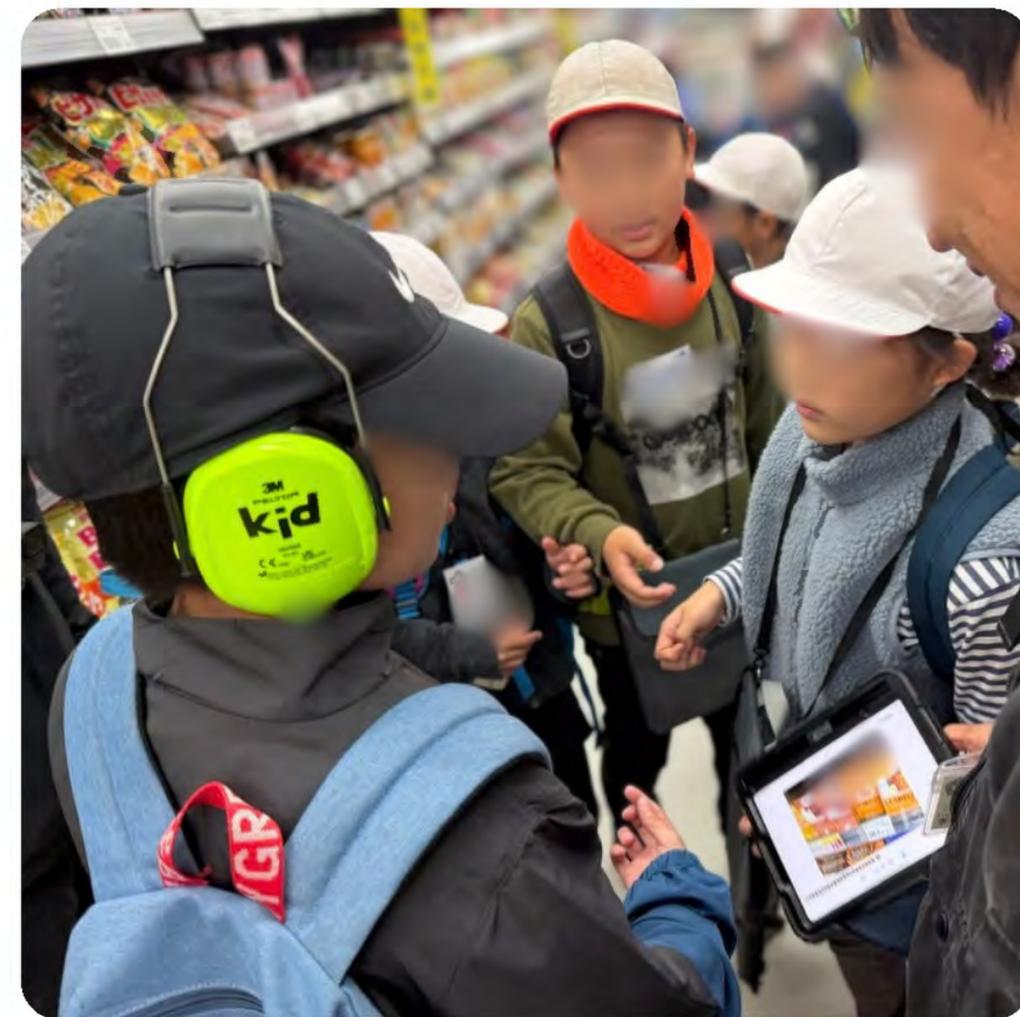


にじ組が3の2を「『にじでん』をつくってしゅっぱつしんこう」
(生単)に招き、共に遊びこむ (R7年6月)



スーパーの工夫を見つけよう（初の合同社会科見学）

／小：社会科 特：生活科（R7年10月）



風の力のはたらき / 小：理科 特支：生活科 (R7年10月)



風の力のはたらき／小：理科 特支：生活科（R7年10月）

一方で、授業後に複数の3の2の児童から担任に…

「今日の先生、授業（の体）にしようとしたでしょ？」

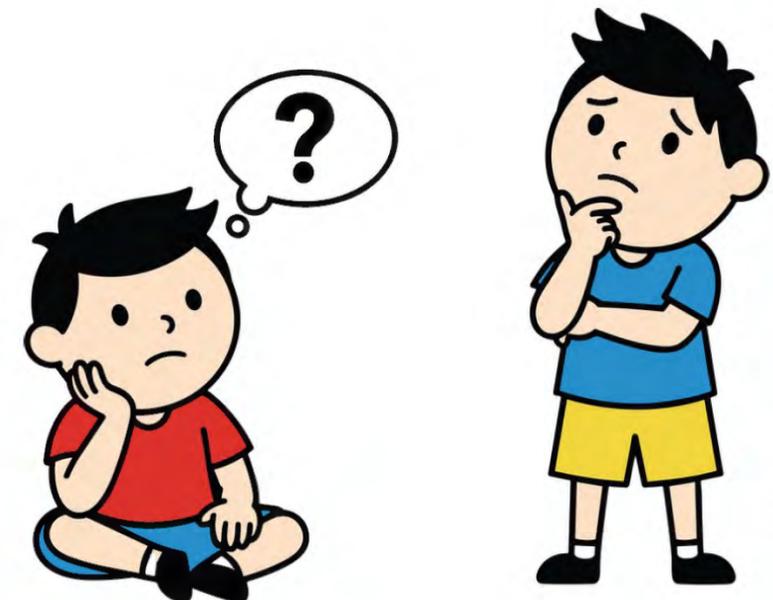
一緒に過ごそうね



授業の体



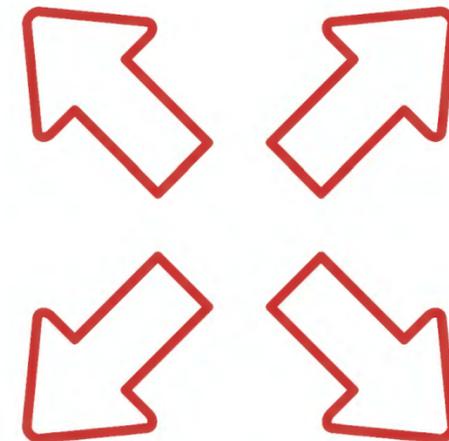
にじ組のみんなに
ってどうだったのかな？



子どもが「共に学んで授業の形をとっても生まれない」と突き付けた事実。その事実を足場に、だからといって「やっぱり教科学習は難しいね」「体育や図工ならいいけど…」と逃げることなく、「では、どうしたら教科の知識や技能をともなった学びの中で共に過ごせるような関係になれるのか」考え合った。



- ①生活の流れや関係性を丁寧に捉え、
単元や授業の前から「共に学ぶ必然性」のある文脈の構築
- ②双方の学びを支え、学び合いを生む、「問い」、教材・教具、
見方・考えを広げる発問、授業展開などの手立ての工夫



「好きなお菓子ランキング」を合わせるとどうなるだろう？ (算数 表とグラフ) (R8年1月)



にじ組 ランキング遊びに興味・関心



好きなお菓子ランキングをする中で、

「3の2のお友達はどんなお菓子が好きかな？」



好きなお菓子アンケートの依頼

生活文脈から「他学級へ向かう問い」

「好きなお菓子ランキング」を合わせるとどうなるだろう？
(算数 表とグラフ) (R8年1月)



3の2 アンケートに答える



3の2の好きなお菓子ランキングを作る



「小学部のランキングはどうなんだろう？」

生活文脈から「他学級へ向かう問い」

「好きなお菓子ランキング」を合わせるとどうなるだろう？
(算数 表とグラフ) (R8年1月)

交流及び共同学習の時間

両校児童が各ランキングを紹介



「人気のお菓子が違うね」
「合わせたらどうなるかな？」



問いの共有：**「3の2と小学部が好きなお菓子
ベスト3は何だろう？
わかりやすいグラフを作ろう」**



グループ (4~5人) 追究へ



「好きなお菓子ランキング」を合わせるとどうなるだろう？ (算数 表とグラフ) (R8年1月)

バランスよく置く、得意のテープで固定する、
項目ごとに確かめて積むなど、
もち味を発揮しながら協力してブロックを積み上げた
→多いものから並べる／4位以下を「その他」にまとめる
／あえて「その他」を作らず順位ごとに並べる等、

各グループで並べ方を工夫しながら、
合算による順位の変化を確かめた



「好きなお菓子ランキング」を合わせるとどうなるだろう？
(算数 表とグラフ) (R8年1月)

「その他」を工夫する姿



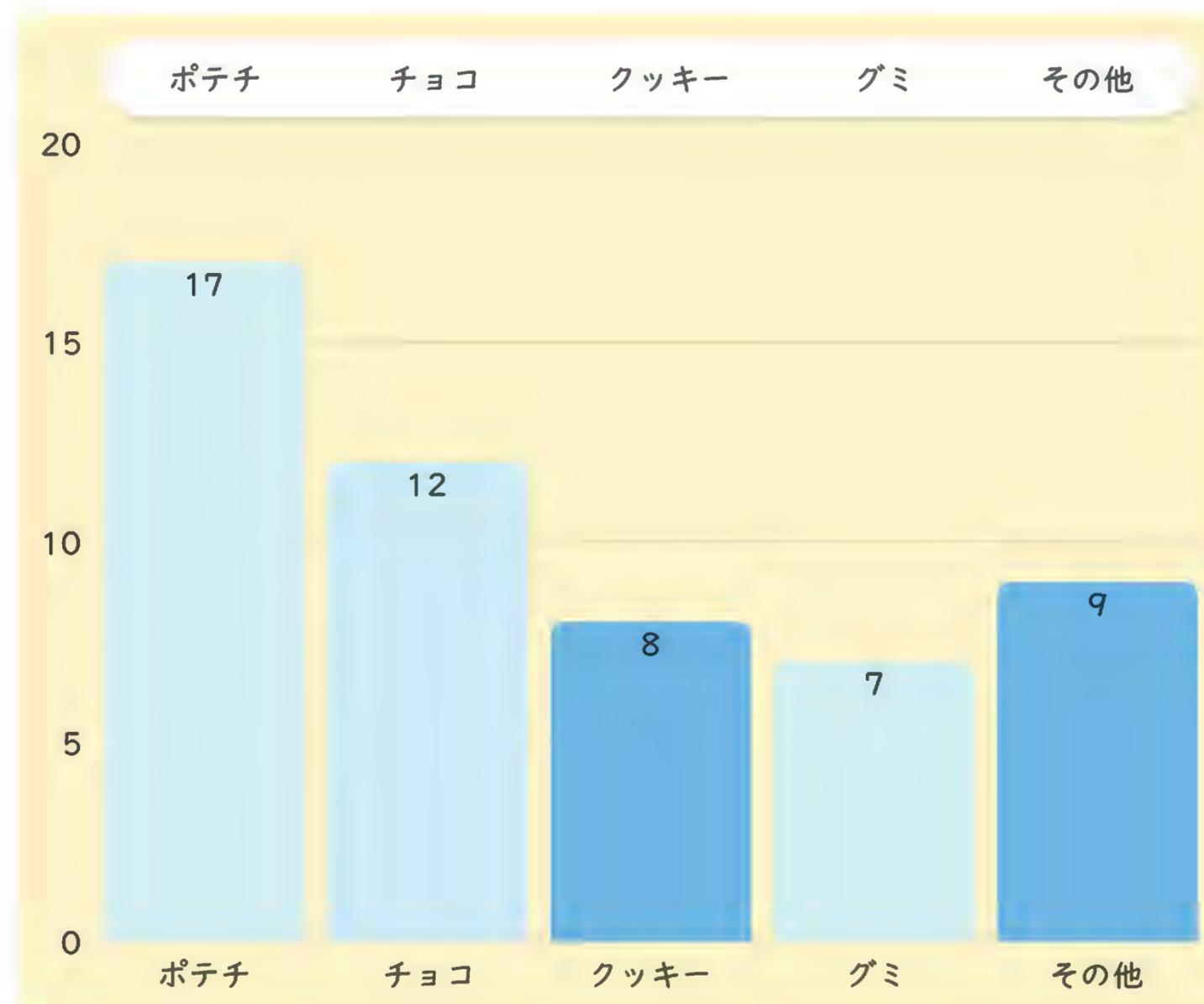
「ベスト3だけ見たいから、あとは『その他』にしたよ」
「全部わかるように『その他』は作らないよ」 等
→それぞれの考える「わかりやすいグラフ」が表現

その後、「わかりやすさ」を確かめるため、
できあがった合同ランキングを発表・共有した



「好きなお菓子ランキング」を合わせるとどうなるだろう？
 (算数 表とグラフ) (R8年1月)

合算ランキング	
1位	ポテチ 17票
2位	チョコ 12票
3位	クッキー 8票
4位	グミ 7票
その他	9票
(スナック・チョコパイ)	



「好きなお菓子ランキング」を合わせるとどうなるだろう？
 (算数 表とグラフ) (R8年1月)

合同ランキングを共有する場面で



説明するにじ組のSさんが3位で一瞬迷う。

何人もの3年2組の児童が身を乗り出して

小声で支える

(Sさんを大切に思う眼差しで)



合算ランキング		
1位	ポテチ	17票
2位	チョコ	12票
3位	クッキー	8票
4位	グミ	7票
その他		9票
(スナック・チョコパイ)		

「好きなお菓子ランキング」を合わせるとどうなるだろう？
(算数 表とグラフ) (R8年1月)

合同ランキングを共有する場面で



Hさんはその姿を手がかりに、「Sさんが迷っていたということは、このグラフは分かりにくいんじゃない？」と発言

→「どうするとよさそうか」意見交換が活発化



合算ランキング

1位	ポテチ	17票
2位	チョコ	12票
3位	クッキー	8票
4位	グミ	7票
その他		9票

(スナック・チョコパイ)

「好きなお菓子ランキング」を合わせるとどうなるだろう？ (算数 表とグラフ) (R8年1月)

合同ランキングを共有する場面で



相手の様子を根拠に、「誰にとっても伝わりやすいか」を確かめ、グラフの目的に応じた表し方（読み取りやすさ）を検討する視点が生まれた



合算ランキング		
1位	ポテチ	17票
2位	チョコ	12票
3位	クッキー	8票
4位	グミ	7票
その他		9票
(スナック・チョコパイ)		

「好きなお菓子ランキング」を合わせるとどうなるだろう？
(算数 表とグラフ) (R8年1月)



示唆されること (抜粋)

⇒ 多様な子どもが共に学ぶ場だからこそ、

「誰にとっても伝わる表し方になっているか」

を確かめ合う対話が自然と生まれた

長野小3の2×特支小学部にじ組の実践から示唆された インクルーシブな学校運営に資する発展的な交流及び共同学習のプロセス

共に在る豊かな未来



共に学ぶことの意義

会うこと、共に活動することへの
興味・関心、期待感

学び合いを支える手立て

生活の文脈

体験や経験、情動や感情の共有

存在を意識、知る

R6年度の交流及び共同学習での制作物



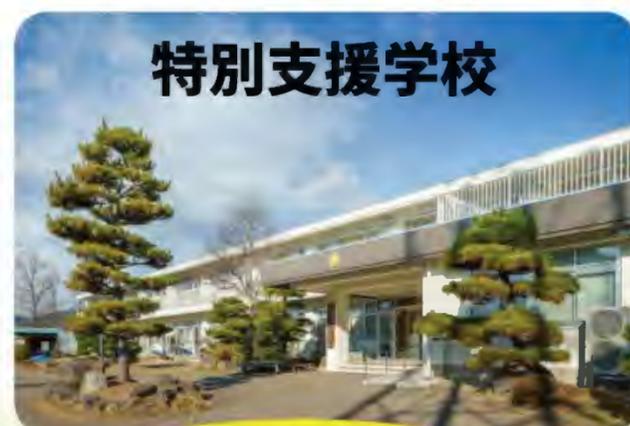
3 その他の取り組み

- 3校の共通基盤の理念の策定
- 来年度からの「交流籍」の実施に向けて
- 登校支援「さくら」
- 通常の学級における包摂性向上に向けた取り組み
- 3校の合同行事／連携合同研修の複数回開催
- ミニ公開の実施
- イタリア視察

○ 3校の共通基盤の理念の策定

R6年度の課題

「3校でどこを目指するか？」



学校目標・学校教育目標

共に在る

自らの力をじゅうぶん発揮し、
主体的に取り組む生活を
今と将来にわたって実現する児童生徒の育成

共に学び一人となる

目指す生徒の姿
「豊かな社会を切り拓こうとする
自立した学習者」

全校研究テーマ

「子どもと共につくる授業」
～子どもと教師の問いを
手がかりにして～

「ひと」との結びつきを深め、
「ひと」と共に生きる児童生徒

「キャリア×STEAM」の学習による
新たな価値を創造する
資質・能力の育成

キャリア教育 × STEAM

3校の共通基盤の理念

私たちは、「共に在る、豊かな未来を切り拓く子ども」を育てます。
「互いに認め合い、支え合うあたたかい社会」の実現を目指します。
「多様性をつながりを育み、しなやかに変化し続ける学校」をつくりまします。
「互いの違いを尊重しながら、対話を通してつながり合う学校文化」
「安心して自己を発揮し、挑戦できる学校文化」を形成します。



3校の先生方に調査

帰納的分析

×

インクルミーティング
にて検討

今後の指針として共有

※これらの取組については、日本特殊教育学会第63回大会（茨城大会）等で発表済み。信州大学教育学部紀要20号に掲載予定。

○ 「交流籍」の実施（R8年度～）



交流籍Aさん（特支はな組）

3校すべての児童生徒と教員が関わりをもてる仕組みとして交流籍の導入

⇒特別支援学校の小・中学部に在籍する全児童生徒が、長野小・長野中の同学年の学級に交流籍を置く

両校担任が協働担任としてチームで取り組む



長野小
1年1組担任
朝陽先生

1の1×はな
協働担任



特支
はな組担任
南堀先生

交流籍と協働担任のイメージ図



○ 3校の合同行事の複数回開催

あすなる音楽祭

ハイタッチリレー
(長野中学友会企画)



○ 3校連携合同研修会の複数回開催



- ・ 3校連携合同研修会 4回
- ・ 3校参観週間
- ・ 授業研究会：3校の教員が相互参加
- ・ 交流籍実施に向けた語る会
- ・ オンライン読書会
- ・ 学会参加、研修報告→カリマネがシェア

ミニ公開の実施



R8年1月22日（木）実施
全国から40名以上の参加者
長野3校ツアー～交流及び共同学習
（算数）の授業参観～講演会～語る会

○参会者のみなさまのアンケートより

→活用可能性アンケートから

とても活かせそう 56.2%

活かせそう 43.8%

→自由記述から

- ・「教科での交流及び共同学習」が成立するための条件への関心（難しさも含めて）
- ・温かな学級経営／隔てないまなざしの大切さ
- ・「支援につなぐ」以前に、通常の学級の授業を変えるという視点・覚悟の大切さ



R8年10月23日、24日の3校合同公開研究発表会につなげていく



○イタリア視察

目的：イタリア視察の学びを「制度」＋「関係の質」として日本の文脈に再定位し、
長野3校の実践へ生かす

期間：R8年3月24日（火）～29日（日）

訪問先：Istituto Statale di Istruzione Specializzata per Sordi A. Magarotto（ローマ聾普通校）／
Istituto Comprensivo Octavia／Istituto Comprensivo 13 Bologna 等

内容：イタリア視察を通して、制度や仕組み、文化が、授業や実際の子どもの学びにどのよ
うにつながっているのかを捉える。併せて、子ども・教員・地域の関係の質を受け取る



得た知見はただの模倣ではなく、長野3校の学校文化・教育課程等を踏まえて翻訳し、
共通基盤（理念）／交流籍の運用／日常の関係づくり／交流及び共同学習の授業設計へ落と
し込むことを目指す

事前学習会の実施

オンライン読書会4回（12月）／「イタリアのインクルーシブ教育を学ぶ会」：2/10
実施・参加者100名（オンライン） 受け手：大内紀彦様（神奈川県立支援学校教諭）
三宅綾様（ローマ在住・コーディネーター）

信大附属型 インクルーシブな学校運営モデル (暫定版)

